黒埼町の人々

第215回　執筆　宮田栄門

黒埼のスポーツ（九）

昭和十六年、陸軍報道部の要請により野球用語が日本語化された。

（先月号からの続き）

戦時下の野球

昭和十二年、日中戦争が始まった頃から次第に国内のすべてが軍国調に統制され、昭和十六年太平洋戦争開戦の二年後には、陸軍報道部が日本野球連盟に対して、「強制はしないが」、といいながら、半ば強制的に野球用語の日本語化を指示してきた。軍の意向を無視できない時代のことである。

アウト、セーフ、ストライクといった用語は、コーヒー、ラジオといった言葉と同じくらいに日本人の生活の中に溶けこんでいたが、英語は敵国語という軍の方針により日本語化に踏み切らざるを得なかった。

二、三の例をあげると、ワンストライクを「よし一本」。スリーストライクを「それまで」。と、これは剣道から思い付いたものという。審判用語でフアルボールは「駄目」。フェアヒットは「よし」。タイムは「停止」等に改められ、こうして敵性用語の追放ということで、アナウンサーが放送に困るような野球用語が軍部によって決められた。

話は変るが、昭和十一年新潟商業学校に入学した渡辺政衛さんが、同校を卒業後、昭和十六年から三年ほど東京へ働きに行った時のことである。休日の或る日、巨人軍のホームグランドである後楽園へ野球の試合を見に行った政衛さんが驚いたのは、今、有名なミスター長嶋の大先輩で、当時巨人軍のエース川上哲治氏が、頭に戦闘帽をかぶり、足に巻脚半をつけた軍装スタイルで野球をしているのであった。しかも、野球放送がまた、陸軍報道部の指示通り、ワンストライクを「よし一本」。フアルボールを「駄目」。タイムを「停止」と放送しているのを聞いて更にびっくりしたということである。

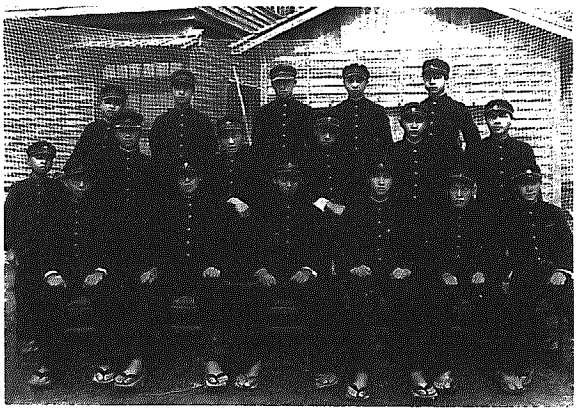
戦争の激化と共に軍部による前記のようなプロ野球へのしめつけが行われる一方。地方草野球も軍事訓練等の強化により、次第にその姿が見られなくなっていった。

太洋クラブのルーツをたどる

時代はさかのぼり、ここに昭和十年（一九三五）に写された、大野太洋クラブの記念写真がある。一年から五年生まで、全員新潟の中等学校生であり、新中五年の木口さんや、新商五年の鈴木藤雄さん達四人の卒業記念写真である。前列向かって右から二人目が昔、八区にあった嘉木屋時計店の鈴木藤雄さんで、野球ではファストを守っていたという。その左隣が今も鳥原新地に健在の木口政雄さんで、長身から投げおろす球は威力のあるピッチャだった。後に県土木部に勤められた。その左が新商五年生の鷲ノ木桜町のショート、田才高明さんであり、その左隣は新商五年生で、セカンド手、八区の笠井組の前社長笠井誠一さんである。前列左端の浅妻康二さんは、当時新中の四年生で、後に早稲田大学から教員生活に入り、女子短大、新潟薬化大学等の教授を務めて退職され、誰よりも太洋クラブを愛し、そのルーツを求め記念誌の発刊に努められた人であるが、残念ながら志半ばに平成十年九月二十二日に亡くなられた。前列一番左端に立っているのは新商一年生の、新田町浅妻茂さん（浅妻薬店）であるが、茂さんは太平洋戦争に出征して戦死された。前列右端にいる新商四年生大塚久松さん（栄町に昔あった一丁亭）は、後に白根の大清に婿入りされたが、大清のばあちゃんよしさんは大野のだんごや（高橋石男さん）から出られた人で、現竹内白根市長は久松さんの子であり、だんごやさんの孫にも当る。二列右端の新商三年高橋某さんキャッチャーは、仲町酒一商店の人としかわからない。同右から二人目、善久の武樋吉郎さんは新商の二年生で、後、太平洋戦争に出征し戦死された。その左隣の渡辺隆さんも新商の二年生で、七区の渡辺政衛さんの兄であるが隆さんも太平洋戦争で戦死された。隆さんの左にいる石黒和也さんも新商の二年生で、当時大野の谷井書店にいた。後に東京都世田谷区宮坂一丁目に住まれた。平成六年頃に亡くなられ、今は絶筆となった石黒さんの太洋クラブへの感想文を後で紹介する。その左隣、新中二年生の真柄慎也さんは鷲ノ木の人としかわからない。後列一番左端の新中一年生の清水善夫さん（現興野一区）は、東大医学部を出て、清水医院を開き、黒埼村長と、町制施行に当って初代黒埼町長を務めた人である。清水さんの左隣、新中■年生遠藤輝雄さんは鷲ノ木桜町の人で、後に市役所に務められたという。その一人おいて右の新中二年生の丸山早苗さんは、二ノ町の宮野文具店にいた人という。後列一番右端の新中三年生笹川晋之介さんは、大野で知られた地主「笹源さん」二ノ町の人である。他に、この写真に写っていないが、清水善夫さんの新中同期生に宗村喜介さん、現中学通りはピッチャーだったという。

写真で紹介した右記の人達が昭和十一年、新商に入学した渡辺政衛さんの「太洋クラブ」の先輩に当たる人達である。

昭和二年、高橋止平さん達新商、新中の野球好きの学生達につくられた太洋クラブは、その後木口政雄さん達の世代。そして渡辺政衛さん達の戦中、戦後と、更に昭和三十年代の人々から、四十年、五十年代の若者達へと引き継がれ、六十年三月には広く町内各地から野球愛好家が集まり、太洋クラブOBの人達の指導と協力を得て、ここに「黒埼クラブ」が誕生した。そして今も太洋クラブは黒埼クラブ中に生き続けている。（続く）



平成十二年三月発行　四三八号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-一一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-三一〇一　編集／総務課（担当・総務係）

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用しています。